

# 大正大学附属図書館蔵『道成寺縁起絵巻』の一考察

渡辺麻里子

## 一、はじめに——問題の所在——

〈道成寺説話〉は、「一人の僧が女に魅入られ、追跡しつつ蛇と化したその女のために、隠れていた鐘の中で取り殺される」<sup>①</sup>話である。これらの骨格を共有しつつも様々なバリエーションを持ち、広範囲に展開したことが知られる。<sup>②</sup>文献上の初出としては十一世紀半ば成立の『本朝法華験記』巻下第一二九話「紀伊国牟婁郡の悪しき女」が知られ、その後『今昔物語集』や『元亨釈書』など、時代を越えて受け継がれた。また文学の域を超えて演劇・芸能の分野に至るまで大きな影響を与え、地域の伝承ともからみあい、道成寺では今も絵解き説法が行われるなど、現代に至るまで多方面に展開し、享受されている物語である。

研究においても、これまで様々な観点から論じられてきた。道成寺説話の生成や展開を総合的に分析する論をはじめ<sup>③</sup>、道成寺創建縁起や道成寺の鐘の縁起という視点、縁起絵巻としての分析、関連する作品として、『賢学の草子』『志度寺縁起』『総持寺縁起絵巻』『藍染川』『磯崎』などから検討する論<sup>④</sup>、さらには能や浄瑠璃といった諸芸能との関連から論ずるもの、在地の伝承やそれを取り込んだ絵解きなどの観点から論ずるものなど、<sup>⑤</sup>周辺の諸分野を交えた多方向から論ずるもの、<sup>⑥</sup>在地の伝承やそれを取り込んだ絵解きなどの観点から論ずるものなど、<sup>⑦</sup>周辺の諸分野を交えた多方向

面からの議論がなされている。

また主題に関しても多様な角度から論じられ、男女の愛執、特に、女性の妄信、妄念といった観点から論じるもの、『法華經』によつて救われるという『法華經』の功德や利益譚、直談抄との関係など仏教の側面から検討する論がある<sup>8</sup>。その他にも熊野信仰との関連、道成寺の創建説話や鐘の伝承との関連などからの指摘もあり、主題についても多方面からの分析が進められている。

男女の愛執に関する諸論は、「女人の執心」という要素が色濃く存在する物語であるという見解が概ね共通しているが、それに異論を唱える論も存在する。本稿は、大正大学図書館所蔵『道成寺縁起絵巻』（以下、大正大学本）を基点として、「女人の執心」を強調する捉え方にいささかの疑問を感じ、道成寺説話の意義を検討するものである。

結論を先に述べると、大正大学本は、奥書がないため明確な成立年代は特定できないものの、およそ近世の中期以降の成立と考えられる絵巻である。近世期に入つて〈道成寺説話〉がますます「女人の妄執」「女人の執念」の恐ろしさを強調する傾向がある中、謡曲「道成寺」の異本「鐘巻」や略縁起系統の本文が記すように、熊野詣での折に定宿にしていた家の娘が幼い時から夫婦の約束をしていたために僧に思いを寄せる型を持つ。また絵解き台本に記される娘の年齢「十三歳」が記されるなど、近世期の展開を考えるための一例となり得る伝本である。またこの本文に添つて考えると、「女人の妄執」が強調される読み方についても検討する余地があると考ええる。

本稿では、大正大学附属図書館蔵『道成寺縁起絵巻』（以下、大正大学本と称す）の紹介をしつつ、大正大学本の『道成寺縁起絵巻』の特徴を述べ、改めて『道成寺縁起絵巻』の意義について考察してみたい。

## 二、道成寺説話と女人

〈道成寺説話〉の主題に関する議論をもう少し確認しておきたい。なお〈道成寺説話〉の定義は、論者によって様々に行われているが、本稿では、おおよそ以下の三つのモチーフを含む話を〈道成寺説話〉とする。

- ①熊野詣の僧に恋した女人が、
- ②約束を果たさず戻らなかつた僧を追いかけ蛇と化し、
- ③道成寺の鐘に巻き付いて、かくまわれた僧を（結果として）焼き殺す。

以上の三つの要素を含む話を〈道成寺説話〉とし、それを絵巻にした作品を『道成寺縁起絵巻』として論じることとする。

『道成寺縁起絵巻』の物語はしばしば「妬婦譚」と称される。客僧への妄執が女人の身体を蛇に変え、男を追って、最終的には焼き殺してしまう。それほどまでに女人の心は激しく恐ろしいものとして注目されることが多かった。淨瑠璃などの演劇作品にもその傾向は引き継がれ、また後日談としての『女釣鐘道成寺』のような物語が生み出されてくるのも、愛するが故に相手を殺してしまう悲しい女を救済しようと発展していったものと思われる。

『法華経』の功德譚として考察する場合、『法華経』の功德は、妄執にとりつかれてしまった女を救済するのに加えて、女の妄念によって殺されてしまった僧をも救済するために行われるものとする。道成寺の『法華経』供養は妄執によって蛇となって苦しむ男女を救済するが、その基底にあるのは女の妄念ということでは同じなのである。

一方で、女の妄念を強調する話とばかりは読めないとする指摘もなされてきた。『今昔物語集』の道成寺説話に注目してこの点を論じたのが、星順子氏の「道成寺説話における女性像」<sup>10)</sup>の論考である。星氏は、待っているようにと

言われて待った女が、だまされたと知って男を恨むことが果たして「悪」なのかという疑問を述べる。熊野の帰道に必ず寄ると言った男の言葉を中心のよすがにひたすら待った女が、裏切りを知って悲嘆に暮れ、悲しみのあまりに死んでしまったその後、蛇身となって男を追うという『今昔物語集』所収話の設定は、『道成寺縁起絵巻』の設定とは異なることを指摘する。『今昔物語集』が詳細な記述をしないために判断が難しい点もあるが、道成寺蔵『道成寺縁起絵巻』のように、女の妄執を強調した物語と方向性が異なることの指摘は重要であると考ええる。

「女の妄執」の強調に対する疑問は、他の角度からも指摘されてきた。例えば田中貴子氏は、「蛇身の女の姿のインパクトの強さに目くらましを受けているだけ」とし、『道成寺縁起絵巻』にしかけられた陥穽」として、釣鐘の縁起とすること、熊野参詣道の道々の伝承を取り込んだことなどを考えるべきだと論じている<sup>11</sup>。また阿部泰郎氏は、この女人は妄執の象徴ではなく、熊野行者が出会う魔物、行者に対する試練と捉え、悪女が僧を追う物語を、熊野権現の方便による神変劇だとする<sup>12</sup>。

これらの議論の基底には、僧を追いかける女人が「悪（悪女）」であるという前提があるが、本稿では、この僧を追った女を「悪女」、女の思いを「妄執」と見なせるのかどうか、そもそもこの点から疑問に思うのである。

本稿で取り上げる大正大学附属図書館蔵『道成寺縁起絵巻』(以下、大正大学本、大正大学本『道成寺縁起絵巻』とする)の本文は、前半が謡曲道成寺の異本「鐘巻」や略縁起系の本文に、後半は道成寺本『道成寺縁起絵巻』(以下、道成寺本)に共通する点が多いが、細部には様々な違いがあり、絵解き台本や在地の伝承に共通する点もあるなど、複層的な形成がうかがわれ、近世の展開を検証することのできる貴重な伝本だと考える。本稿では、「鐘巻」や略縁起、また道成寺蔵『道成寺縁起絵巻』などと比較して論じていく。

大正大学本では、女が男を追う理由について、『道成寺縁起絵巻』が一方的に僧に懸想するのに対して、男の側の偽る姿勢が強調されていく点が注目される。近世に、女の妄執が強調されて展開していく中で、中期以降に成立したと思われる「鐘巻」や略縁起系の諸本が、男の「偽り」を明確に表現し、対する女性の一途さを強調していく点に着

目し、大正大学本の詞書の分析を通じ、『道成寺縁起絵巻』の主題や意義について検討していきたい。

### 三、大正大学附属図書館蔵『道成寺縁起絵巻』概要

大正大学付属図書館蔵『道成寺縁起絵巻』（大正大学本）は、絵巻一巻である。『道成寺縁起絵巻』には二巻本と一巻本があるが、大正大学本は一巻本である。以下に書誌を示す。

〔装丁〕 卷子一巻

〔外題〕 ナシ

〔内題〕 縁起

〔表紙〕 緑地金糸巾繫花草紋布地〔見返〕 緑布地金箔散〔軸〕 木軸〔表紙の布地張〕

〔料紙〕 楮紙〔裏打ナシ〕

〔紙数〕 全二〇紙

〔寸法（全長）〕 縦二五・五糎×横（全長） 七二七・四糎

〔寸法（一紙別）〕〔表紙〕 縦二五・五×横一七・七糎、〔見返〕 横一七・二糎

以下、横寸法（第一紙）一五・〇、（第二紙）三六・八、（第三紙）三九・〇、（第四紙）三九・二、（第五紙）三九・五、（第六紙）三八・五、（第七紙）三九・六、（第八紙）三九・五、（第九紙）三九・〇、（第一〇紙）三九・六、（第十一紙）三九・五、（第十二紙）三九・六、（第十三紙）三九・四、（第十四紙）三九・三、（第十五紙）三九・五、（第十六紙）三九・六、（第十七紙）三九・五、（第十八紙）三九・四、（第十九紙）一四・八、（第二〇紙）一三・九糎。  
〔奥書〕 ナシ

〔威書印〕 墨方陽刻印（□□□□）、判読不明

奥書はなく、書写年時は未詳ながら、女の絵の衣装や髪型、料紙の紙質などといった現状から、近世中期以降に制作された絵巻と判断される。現状では、絵巻の上部・下部の文字が一部切れている点があり、糊で貼り継いだ箇所、文字が重ねられて読みにくくなっている箇所があることなどから、後に補修が行われていることが推測される。

『道成寺縁起絵巻』の特徴として指摘される、詞書と画中詞の区別が曖昧であるという点が、大正大学本では、より顕著に確認できる<sup>(1)</sup>。詞書と絵から構成される絵巻であるが、大正大学本では、絵中に記される画中詞と詞書が、明確な区別がなく記されている。人物名や地名などを注記した名札と、短いかげ声のような登場人物の台詞の部分は明確に区別できるが、その他、地の文として記されるものは、いわゆる「詞書」として、紙幅の上から下までを全体に使用して文字を書いている箇所と、画中詞と見なせる箇所について明確に区別がない。詞書の文章、絵を挟んで続いている箇所なども確認できる。そのため、詞書の場面数の数え方が曖昧になるが、とりあえず一旦の判断をして通し番号を付したところ、第一の詞書から、全体で十四の場面に分けられた。また絵は、異時同図法としての絵と考えられる場面もあるが、こちらも一旦、女の姿を一つの指標として、場面ごとに絵の通し番号を付した。絵については、十四面を数えることができた。

大正大学本の全体の構成を確認しておくため、以下の表に、詞書と絵について場面ごとの概要と特徴を示した。先に述べたように、大正大学本の場合、画中詞と詞書との判別がしにくい箇所があるが、便宜上いづれかに振り分けて一覧表とした。詞書と絵に通番号を付し、詞書・絵の内容を示し、備考欄には、諸本と比較検討する際に差異の現れる点を中心に、大正大学本の特徴を挙げた。

【表一】大正大学附属図書館蔵『道成寺縁起絵巻』（大正大学本）の構成

紙数	詞書	絵	詞書の内容	絵の内容	備考
1	一		奥州の若い美僧の安珍は熊野詣の際に紀州真砂の庄司の家を宿所とし、その娘の清姫に常々夫婦となろうと言っていた。十三歳となった清姫は、今回の熊野詣での帰りに夫婦となる約束をし、安珍を見送った。	(一)内は描かれた絵	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「安珍」「清姫」の名</li> <li>・「真砂」の地名</li> <li>・安珍は「奥州の若い美僧」</li> <li>・庄司の家は熊野詣での定宿</li> <li>・安珍と清姫は初対面ではない。</li> <li>・安珍は常々夫婦になろうと清姫に言っていた</li> <li>・十三歳になった清姫は今こそ結婚の時と考える。年齢が記される。</li> <li>・「み熊野（三熊野）」という表記</li> </ul>
2					
3	二	一	清姫は安珍を待つが約束の下の日に安珍は現れず、順礼の人に尋ねる。	「庄司の宅」女が僧を見送る（見送る女、出かける僧）	
3					
4	二			〔画中詞〕道行く人々に尋ねると、既に通り過ぎて、十二、三丁は先に行つたと教えられる（女と通行人三名）	

9	9	9 8	7	7 6	6 5
五	四		三		
		五		四	三
<p>女は僧を見失い悔しく思い、悪念から大蛇となる。</p>	<p>因果経の四句の文を唱えながら逃げる。僧は一里半逃げ延び、天田川を渡る。船頭に、後から来る女を渡さないように頼む。</p>	<p>〔画中詞〕僧が唱える経文 (火炎を吐きつつ追う女、笈や笠を捨てて逃げる僧)</p>	<p>上野で安珍を見つける。清姫が呼びかけるが人違いだと言われる。吹きかける息が火焰となり、僧は笈や笠を捨てて逃げる。</p>	<p>〔画中詞〕切辺五体王子にて、切辺川を渡る。 〔切辺五体王子、切辺川を渡る女〕</p>	<p>〔画中詞〕女は腹を立て、髪を振り乱して追いかける。道行く者は恐ろしく思う。 (女と馬上の通行人)</p>
<p>・見出しに「垣屋浦」の地名</p>	<p>・「天田川」の地名</p>		<p>・「上野」という地名 ・火焰は、人違いだと言われて吹きかけた息が変化したもの</p>	<p>・「切辺川」という地名</p>	

13	13 12	12	11	10
七		六		
	八		七	六
僧を下ろした釣鐘に隠し、太刀の鞘を外して女に対抗する準備をした。		安珍は一里半ほど逃げ延び、道成寺に着く。命を助けて欲しいと頼み、道成寺の僧たちは、僧をかくまうために急いで釣鐘を下ろした。		
	〔画中詞〕釣鐘を下ろして僧を入れる時、釣鐘を動かすかけ声（道成寺の法印一名、稚児一名、人足の僧五名、釣鐘に入る僧）		〔画中詞〕女、衣を脱ぎ捨てて日高川に入る。甘尋ほどの大蛇になり、安々と川を渡る。 （大河を渡る大蛇（龍）、尾には刀剣）	〔画中詞〕女は天田川へ来て、川を渡すように船頭に頼む。 （首から上が火炎を吐く蛇（龍）、首から下は着物を着た女、船にのる船頭と大きな川）
			・蛇になるのは天田川を渡る時 ・渡守は「女人結界」を理由に断る	

16	16	15	15	14	14	13
十		九			八	
	一十			十		九
その後、道成寺の僧たちが集まり、鐘に水をかけて引き開けてみれば、僧は炭になり骸骨のようになつていた。		大蛇は道成寺の門から中に入つて僧を探す。釣鐘を見て中に行くと、尾で鐘を三時ばかり叩く。鐘の中から火炎が出る。大蛇は「本望を遂げた」と言い、道成寺の西浦の海に身を投げた。今でも「蛇塚」という古跡がある。			大蛇が道成寺に到着、武装して待ち受けた僧たちは逃げる。	
	鐘の周りに四重に巻き付く大蛇。身体全体から炎を出す。		〔画中詞〕「道成寺」「二王門」など 〔道成寺の二王門、門前の殺生禁制の札、火炎を吐く大蛇（龍）〕			〔画中詞〕 武装する僧の気合いの入った言葉 （長刀を持つ僧、槍を持つ僧、太刀を持つ僧、各一名、計三名）
・客僧は炭になり、骸骨のようだった		・鐘は「湯」にならない ・大蛇は道成寺の西浦の入海に身を投げた ・「蛇塚」の伝承		・道成寺の門前に「殺生禁制」の札が立つ		

19	18	18	18 17	17	17	17 16
四十		三十		二十	一十	
	四十		三十			二十
その後、清浄な衣を着た二人が来て、法印の御願により天人に生を受けることができた」と謝辞を述べた。		夢から覚めた法印は、僧衆を集めて御功を行い、その功力によつて頓成する		その後、法印の夢に、苦しむ兩人が蛇になつて現れ、助けられるように頼む	僧たちは残念なことで涙を流した。	
	女 〔画中詞〕ナシ 〔雲に乗る美しい装束を来た男		〔画中詞〕ナシ 〔眠る僧、夢中の蛇二匹、着物と数珠を掛ける長押〕			〔画中詞〕僧たちの悲しむ言葉 〔横にした釣鐘、黒い骸骨、悲しむ僧が三名〕
・第20紙は墨印のみ			・『法華経』とは記されない			

以上のように、詞書は一四の場面、絵は一四面で構成される。

詞書一の、女が僧に思いを寄せる設定は、道成寺本『道成寺縁起絵巻』のように突然一方的に女が初めて出会った若い美僧に思いを寄せて激しく迫るのではなく、謡曲「道成寺」の異本「鐘巻」や略縁起にあるように、熊野詣での定宿にしていた真砂の庄司の家の娘が、かねてから妻になるよう言われていたことを信じて思いを寄せるという設定になっている。謡曲では「十三歳」とは記されないが、大正大学本では「十三歳」という年齢が記される。<sup>15)</sup>

道成寺の鐘にかくまわれるが、大蛇になった女に巻かれて死んだ後、女（大蛇）は、「本望を遂げた」と言つて、道成寺の西浦に入水して死ぬ。在地の伝承を背景にしていることが推測される。

また救済の場面では、『法華経』が全く出てこない。道成寺の法要が曖昧で、僧侶が多く集められたことは記されるものの「功力」とのみ記して、法会は詳しく記されない。また道成寺本『道成寺縁起絵巻』が、男女の行き先を切利天・都率天などと明記するのに対して、「天人」に生を受けたとのみ記すなど、道成寺の僧によつて救済されることを記すものの、詳しくは記されないのである。

#### 四、大正大学附属図書館蔵『道成寺縁起絵巻』の特徴

続いて、大正大学本の内容的な面での特徴について、本文と絵の両面から検討することとする。主人公の女が「清姫」、僧が「安珍」という名を記すことや、渡る川が「日高川」の他に「天田川」になっている点、清姫の姿、特に髪型などから、近世の中期から後期を思わせる本文や絵の特徴を有しており、〈道成寺説話〉が近世的展開を見せる伝本であることは明らかである。ところが大正大学本を詳しく見ていくと、女の妄執を強調していく展開とは異なる方向性が確認できる。これらの点について、道成寺本『道成寺縁起絵巻』等と比較しつつ、具体的に検討していきたい。

(1) 詞書一、清姫が安珍に思いを寄せるまでの場面

まず第一に、「詞書一」の物語の最初の設定、清姫が安珍に思いを寄せる過程に注目したい。以下に大正大学本の釈文を示す(翻刻は付録を参照)。

昔、人王七十代、醍醐天皇の御宇、奥州白川に安珍と申す、若き美僧有り。常に御熊野を念じてけり。山伏の姿となり、毎年詣でける。参り下向に、紀州楼郡真砂の庄司が元を宿として泊りける。彼の庄司が娘に、清姫とて一人の美女あり。客僧常々申けるは、「汝こそ我が夫(16)なれ」とて、相談して戯れけるを、彼姫、常に実と思ひ居けるが、

物語の冒頭、清姫が僧に思いを寄せるまでの設定は、道成寺本『道成寺縁起絵巻』(以下、道成寺本)とはかなり異なる。奥州白川出身の安珍という美しい僧は、熊野詣を毎年の恒例としており、紀州楼郡真砂の庄司が家を宿にするのも、常のことであった。清姫はその家の美しい娘で、宿泊する安珍(客僧)は、常々清姫に対して、「あなたこそ私の妻となる人だと」常々「戯れ」に言っていた。それを聞いている清姫はまだ年齢が幼い設定で、いつも安珍の言葉を「実(本当のこと)」と思つて過(17)こしていた。

つまり、「あなたを妻としたい」と安珍が常々幼い清姫に言っていたのは全くの「戯れ」だったが、言われた幼い清姫は、全く疑うこと無く誠の言葉と思つて信じていたというのである。

延長六年子八月、客僧常の如く御熊野へ参るとて、彼庄司が元へ来りける。姫つくづく思ひけるは、「我当年十三才なり。此度夫□と連れ、奥州へ下らばや」と思ひ、夜更け、僧の寝間へ行き、「これこれ、起させ給へ」

と有りければ、客僧「何事やらむ」と給ふ。「此度奥州へ、連れ行き給へ」と言ひければ、客僧、「はつ」と思ひしが、「いやいや未だ年も行かざる者、少し偽さむ」と思ひ、「如何にも、只今は御熊野へ参るなり。下向に寄りて連れ行かむ」と言ひければ、姫悦びて、明くる日、庄司が元を立ち出しを、はるばる門送りして別れけり。

延長六年のこと、恒例の熊野詣のために今回も庄司が家に宿泊した安珍は、いつもの様に、戯れに「あなたを妻としたい」と清姫に言っている。今まで幼かった清姫であるが、今年は十三才という大人となつて結婚できる年齢になつたため、今年は、「本当に夫婦となり、安珍が帰る途次には、妻として故郷の奥州に一緒に下りたい」といよいよ真剣に考えるようになった。そこで、僧の寝所に行つて結婚を申し入れることとなる。この寝間の僧に迫る展開は、大正大学本では、もともと安珍からの求婚の言葉を信じていたこと、そしてまだ年端もいかず、これまで男性と交際したこともないであろう十三才の姫君が成人したために思いに答えるという設定である。また清姫の思いを知つた僧の反応であるが、相手の女性がまだ年端もいかなない女性（子ども）であることから、さらに「少しだまそう」と思い、「歸りに寄るので、結婚して一緒に奥州に歸ろう」と言うのである。

道成寺蔵『道成寺縁起絵巻』（以下、道成寺本）などでは、一夜の出会いで偶然に宿を借りた若い僧に一目惚れしてしまった女性が、僧にいわば強引に結婚を迫るのを、僧が念願の熊野詣でを全うしたために断るといふ、女の一方的な思いとして記される。断つてもどうしても聞き入れない女への対応に苦慮した僧が、方便として、「歸り道に寄るから待つてゐるよに」と、なだめるために止む無く嘘をつく設定とは大きな違いがある。大正大学本では、常々夫婦となろうと冗談で言われていたのを全く疑わなかつた清姫が、安珍の言葉をただ信じて成長し、結婚できる年齢になつて結婚を申し出たところ、それを安珍はさらに相手が幼いために「少し偽さむ」と思ひ、熊野詣の歸りに結婚するからそれまで待つてゐるよにと言つたという設定で、どこまでも悪い罪深い僧として記される。

道成寺本では、女性が相手が宿願の熊野詣でを果たしたいと願つてゐる若い僧に、一方的に迫る話になつていたり、

一目惚れの愛情の強さがさらなる狂気をも感じさせる設定であるのに対して、幼い清姫が、毎年会おう美しい僧が、いずれ結婚しようと言いつけていることをそのまま信じたというもので、清姫が安珍に寄せる恋心はむしろ無理からぬことと理解され、清姫の思いを「狂気」として描かない点が注目される。むしろ安珍の方が、最初から「戯れ」に結婚の約束をし、今回意を決して迫る清姫をも「偽」ってだまそうとしていると明確に記している点に、大きな違いがあることを指摘しておきたい。

なおこの設定は、謡曲「鐘巻」や、「安珍清姫略縁起」に近い。参考に江戸時代に版行された「安珍清姫略縁起」の本文を示しておく。<sup>17)</sup>

道成寺縁起に付て一つの物語あり。人皇六十代醍醐天皇の御宇、奥州白川といへる処に安鎮といへる僧あり。常に三熊野を尊信し、山伏の姿と成て、同国室の郡真砂の庄司か許を宿として毎年此処に宿りける。此庄司に吉人の娘あり、名を清姫と呼て、また幼稚の頃より容顔麗しく殊に恰利也ければ、かの僧いとおしみて戯れ言などいひつつ、「後には妻ともなして奥州へ具し行ん」などいひけるを、娘は稚き心に誠と思ひ、いと嬉しげにていなむ気色も無かりしは恵縁の初とぞ後には思ひ知られける。

扨延長六年八月の事也しに、例年のごとく庄司が許に宿りけるに、かの娘、夜更、人静りて安鎮が閨に忍来て言やう、「わらはもはや今年十三歳に及べり。いつまで斯て置給ふや。此度は是非に具して陸奥へ下らせ給へ」とかきくどきて申にぞ、安鎮は「よしなき戯ごとをいひし事よ」と後悔すれど色にも出さず、「ひと先、たばかりて見ばや」と思ひければ、「いかにも今年は具して下るべし。去ながら、いまだ参詣を遂ざれば、必ず下向を待給へ。伴ひて奥州へ下らん」と云すかして、明れば庄司が許を立出るに、娘は門送りして一首の歌を詠す。

安珍の偽りの言葉を疑いなく信じる清姫という設定は酷似しているが、見送り時の和歌の贈答を記したり、安鎮が

若いことを明記しない点などの差異が確認できる。

以上、大正大学本は、清姫は幼く、熊野詣の定宿にしていた安珍が、来る度に夫婦の約束をすることを全く疑わずにいて、今年十三歳の結婚適齢の時を迎えて、いよいよ妻になろうと一途に思う清姫と、どこまでも偽りを重ね、清姫が結婚を申し出た際にも、驚きながらもさらに騙そうとし続ける安珍が対照的に描かれているのである。

(2) 女が吐く炎

第二に、女が大蛇となった折に吐く「炎」についての描写である。だまされたと気付いた清姫が僧を追いかけて行き、「切辺五体王子」を過ぎて「上野」にて僧に追いついた折のことである。

上野といふ所にて、彼の僧を見て、

「ノノく、夫なる御僧を見たる様なり。御方なり。待給へ」

と有ければ、客僧、後を見て「はつ」と思ひしが、

「角は参り候へ共、人違にても候はむ」

と念じける。

「いやいや我が見る目に違ひはせじ」

と息を吹かくれば、不思議也。その息、火焰と成り、客僧の姿に掛れり。客僧是を見て、「扱は叶わじ」とや思ひけれ。笈も笠も取りて捨失て、「うする方へ失よ」とて珠数をくり、南無大慈大悲権現と口に唱へ、

その僧を見た清姫は、「私の夫である御僧ですね、お待ちください」と言いかけると、安珍の方は、後ろを振り返つ

て、「人違い」であることを願う。それに対して、「私の見間違ではない」と言い、息を吹きかけるとその息が「炎」となったと言うのである。道成寺蔵『道成寺縁起絵巻』などが、女の妄執、激しい怨念が炎と化していったことを考えると、人違いだと言われて吐いた息が炎になったというのは、安珍の嘘が引き金になっていて、これもまた、清姫の一方的な妄執、男を思う愛情が狂気に化した炎とは全く異なる設定なのである。もう一点、この炎を吐く場面では、まだ清姫は人間の姿をしていて、走りながら大蛇となって火炎を吐きながら追いかける、道成寺蔵本系統の話とは大きく異なっている。

なお大正大学本では、女が蛇と化していくのはこの次の場面からとなる。『因果経』の四句偈を唱えながら逃げた安珍に対して、この経文のために目がくらんだ清姫が僧を見失ったところで「腹立ちや、口惜しい」と言う場面を描いた絵で、初めて首から上が大蛇（龍）として描かれる。道成寺本系が、走りながら大蛇と化して火を吐きながら追う恐ろしい姿とは異なるのである。

以上の点をまとめると、大正大学本の『道成寺縁起絵巻』では、安珍の言動に重大な罪を記し、一方、清姫の悲しみに同情するような文脈の基底が作られていることが指摘できよう。

### (3) 『法華経』の功德

さて一方で、清姫が一方的に思いを寄せる道成寺本『道成寺縁起絵巻』の系統の物語では、これほどまでに罪深い女人を救済してくれるものとして『法華経』の功德や道成寺の僧侶達の功德が重要になるが、大正大学本では、この救済のモチーフは構造としては用意されているものの、『法華経』は登場せず、行き先も明確には記されず、簡略な救済譚となっている。その場面は以下のように記される。

夫より法印夢さめ、「扱々不憫や」と思はれて、僧衆を数多集めて、頓成の功力被成ける。その功力により、亦其後、

清淨の宝衣着したる式人來り、申し給ふ、

「誠に御功の御願により、此度、天人に生を受け、此上もなき難有存る成」

と言ふて、手を合するよと思へば、夢は覺めにけり。

僧衆を多く集めて法会をしたことは記すものの、『法華經』の書写供養を行うなどと法会の内容や『法華經』の功德については一切触れられない。また道成寺本で忉利天や都率天に行つたとするような具体的な行き先が明記されず、大正大学本ではただ「天人に生を受け」とするのみであり、道成寺のご加護を強調したものにはなっていない。

以上、大正大学本は、道成寺本をはじめとする『道成寺縁起絵巻』の系統とは一線を画した記述になっていることが確認できる。安珍は清姫を当初から騙し続ける罪深い僧であり、清姫は幼い頃から純粹に安珍のことを慕い、いずれは我が妻にと言う安珍の言葉をひたすら信じる女子として描かれる。十三歳になった今年は、恋心を募らせ、いよいよ妻になる時だと思いつめるのは無理からぬ筋立てになっている。むしろ安珍の方は、長年幼い清姫をからかい、本気になって結婚を求めてきた清姫をも、「少しだましてやろう」とする悪心を持つ者として描かれるのである。

物語冒頭の清姫が安珍に思いを寄せる段は、謡曲「鐘巻」や「安珍清姫略縁起」と類似するが、後半、鐘巻では鐘が湯になるなど、全く異なる展開をし、大正大学本はむしろ道成寺本に似る。その一方で、大蛇が道成寺の西の浦に入水するモチーフなど、在地の伝承が取り込まれている。近世に展開する〈道成寺説話〉の中でも、様々な要素を取り込んだ作品構造になっているのである。

## 五、おわりに

大正大学本『道成寺縁起絵巻』は、清姫が安珍に思いを寄せるまでの設定が道成寺本『道成寺縁起絵巻』とは大きく異なり、清姫は幼く疑わずに安珍を信じる女子、安珍はむしろ罪深い僧侶として描かれていることを述べてきた。『道成寺縁起絵巻』や『道明寺説話』は、多くが女人の妄念を表す妬婦譚であり、近世期に『道成寺説話』が展開する際にも女の妄執を強調する傾向は強く見られていた。

しかし近世中期以降に成立したと思しき大正大学本を見てみると、こうした女人の妄執ばかりを強調したものではない、基底の異なる道成寺説話の方向性が見られることが確認できる。また、大正大学本には、中世・近世期の『道成寺説話』を検討する上で必要な様々なモチーフが組み合わさっていて、近世期の道成寺説話の享受や展開を検討する上で、大変貴重な作品であると考ええる。

なお、本稿では触れることができなかったが、他にも、道成寺の門前に「殺生禁制の札」を立てる絵を示すなど、大正大学蔵本には、他本に見られない記述がいくつか確認できる。今後は、さらに詳細に検討していきたいと考えている。

【付記】貴重な資料の閲覧を許可してくださいました、大正大学附属図書館に心より御礼申し上げます。

### 註

(1) 内田賢徳「道成寺縁起」絵詞の成立（『桑実寺縁起・道成寺縁起』続日本絵巻大成13、中央公論社、一九八二年）による。

(2) 林雅彦「翻刻 紀伊国日高郡吉田村 鐘巻道成寺縁起 安鎮清姫略物語」（『明治大学教養論集』五五二、二〇二〇）

- 年一二月)、石川透「慶応義塾大学国文学研究室蔵『道成寺縁起絵巻』解題・影印」(『三田国文』四二、二〇〇五年六月)、徳田和夫「へ翻」『道成寺縁起』の在地伝承系の絵巻概観——付・翻刻二種——」(『学習院女子大学紀要』一一、二〇一〇年三月)など、様々に報告されている。
- (3)高野辰之「道成寺芸術の展開」(『日本演劇の研究』二、改造社、一九二八年)、五来重「道成寺縁起絵巻の宗教性」(『絵巻物と民俗』角川書店、一九八一年)、徳江元正「道成寺譚の成立」(『室町芸能史論攷』三、弥井書店、一九八四年、初出一九八二年)、小峯和明「中世説話文学と絵解き」(『絵解き』一冊の講座、有精堂、一九八五年)、徳田和夫「絵解きと物語享受」(『文学』一九八六・五四、一九八六年一二月)、恋田知子「室町の道成寺説話——物語草子と法華経直談——」(『仏と女の室町——物語草子論——』笠間書院、二〇〇八年)などによる。
- (4)大橋直義「『道成寺縁起』書名——覚書——」(『きのみなと』八、二〇二一年)、大橋直義「道成寺創建縁起と『道成寺縁起』」(『中世文学』六六、二〇二二年六月)などを参照。
- (5)岡見正雄「御伽草子絵について」(『室町文学の世界』岩波書店、一九九六年(初出一九六八年))、石川透「奈良絵本・絵巻の研究と収集(二三)道成寺縁起」(『日本古書通信』八六(八)、二〇二二年八月)、和歌山県立博物館「道成寺縁起——絵巻でたどる物語——」(和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会、二〇一八年)、兪仁淑「『道成寺縁起絵巻』——『華嚴縁起絵巻』との関わり」(『国文学 解釈と鑑賞』六一・五、一九九六年五月)など
- 徳田和夫「へ翻」『道成寺縁起』の在地伝承系の絵巻概観——付・翻刻二種——」(『学習院女子大学紀要』一一、二〇一〇年三月)などを参照した。
- (6)千野香織「日高川草子絵巻にみる伝統と創造」(『金鱗叢書——史学美術史論集——』八、一九八一年六月)などに詳しい。『いそさき(磯崎)』は、嫉妬のあまり夫の新妻を撲殺してしまう話で、女の妄念の恐ろしさを伝える話とされることが多いが、大正大学本の場合、詫びてあれこれ言い訳をする夫を許せない妻を「女の心のはかなさ」と表現する一方で、新しい妻を連れてきた夫を「男の心の拙さ」とするなど、女人ばかりを悪としない姿勢

がうかがわれる。拙稿「大正大学附属図書館所蔵『いそざき（磯崎）』をめぐる一考察」（『大正大学研究紀要』一〇七、二〇二二年三月）を参照。

- (7) 吉村旭輝「道成寺物」の流行による道成寺と熊野参詣道の変容——『道成寺縁起』絵解き成立を視野に入れて——」（『芸能史研究』二二四、二〇一九年一月）、市岡聡「道成寺と『法華験記』——鐘鐺勸進と説話の成立——」（『芸能史研究』二二四、二〇一九年一月）、和歌山県立博物館『道成寺縁起——絵巻でたどる物語——』（和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会、二〇一八年）、徳田和夫「能と説話・伝承『道成寺をめぐる』——『道成寺縁起絵巻』の周縁（1）」（『観世』八四（六））八四（一二）、二〇一七年六月～十二月）、和歌山県立博物館『道成寺と日高川——道成寺縁起と流域の宗教文化（特別展図録）』（和歌山県立博物館、二〇一七年）、高岸輝「道成寺と日高川——道成寺縁起と流域の宗教文化——」（和歌山県立博物館特別展示図録『道成寺と日高川』二〇一七年）、内藤久義「水の女——『道成寺縁起』と道成寺説話の周辺から——」（『昔話伝説研究』三三、二〇一四年四月）、愛宕邦康「安珍・清姫の道成寺説話の原話に関する一考察——新羅義湘・善妙伝説との関連性に着目して——」（『大倉山論集』五八、二〇二二年三月）、志村有弘「近代文芸と唱導——道成寺伝説と安達ヶ原伝説を視座として——」（『国文学 解釈と鑑賞』七二・一〇、特集「唱導文化の展望——文芸と唱導——」二〇〇七年一〇月、至文堂、菊地仁「道成寺縁起——川を渡る蛇女房——」（『国文学』四三・五（六二六）、一九九八年四月）、大貫真実「立教大学図書館蔵『安珍清姫絵巻』について」（『資料学の現在』（シリーズ 日本文学の展望を拓く 第五巻）笠間書院、二〇一七年）など多数ある。
- (8) 安永寿延「道成寺説話の系譜——母権制的説話の発見——」（『文学』一九六〇・二八、一九六〇年四月）、恋田知子論文（前掲註③）などを参照。
- (9) 小野真代「中世文学における妬婦譚について——女性の救済をめぐる——」（『駒沢大学大学院国文学会論輯』三二、二〇〇四年三月）、林雅彦「特集・中世文学に描かれた性——『道成寺縁起絵巻』に見る女の情欲——」（『国

- 文学 解釈と鑑賞』七〇・三（八八六）、二〇〇五年三月）など参照。
- (10) 星順子「道成寺説話における女性像——『今昔物語集』巻十四ノ三話「紀伊国道成寺僧写法花救蛇語」を中心として——」（『弘前大学国語国文学』三一、二〇一〇年三月）による。
- (11) 田中貴子「再生する物語——『道成寺縁起絵巻』の魅力——」（初出「再録する物語」（赤坂憲雄『物語という回路』新曜社、一九九二年。改訂再録『あやかし考』平凡社、二〇〇四年）による。
- (12) 阿部泰郎「龍蛇と化す女人——『華嚴縁起絵巻』と『道成寺縁起絵巻』をめぐりて——」（『湯屋の皇后——中世の性と聖なるもの——』名古屋大学出版会、一九九八年（初出一九九二年）による。
- (13) 道成寺蔵『道成寺縁起絵巻』は重要文化財。写真版や翻刻は、『続絵巻大成』13、図録『道成寺と日高川』（前掲註7）などに載る。
- (14) 森正人「科白と絵解と物語——『道成寺縁起絵巻』をめぐって——」（『文学』一九八四・五二、一九八四年四月）などに詳しい。
- (15) 徳田和夫論文（前掲註③）では、「十三歳」の明記について、背景に在地の伝承を取り込んだ絵解きの台本を想定する。
- (16) 「夫」の次の字は不読。「マ」の字で、「夫」と合わせて「つま」と読ませているか。次に続く段にも同字があるが、いずれも不詳。
- (17) 「安珍清姫略縁起」の本文は、林雅彦「翻刻 紀伊国日高郡吉田村 鐘巻道成寺縁起 安鎮清姫略物語」（『明治大学教養論集』五五一、二〇二〇年二月）により、一部表記を改めた。石川透「慶応義塾大学国文学研究室蔵『道成寺縁起絵巻』解題・影印」（『三田国文』四一、二〇〇五年六月）、徳田和夫「〈翻〉『道成寺縁起』の在地伝承系の絵巻概観——付・翻刻二種——」（『学習院女子大学紀要』一二、二〇一〇年三月）などを参照した。

【付録二】大正大学附属図書館蔵『道成寺縁起絵巻』写真図版

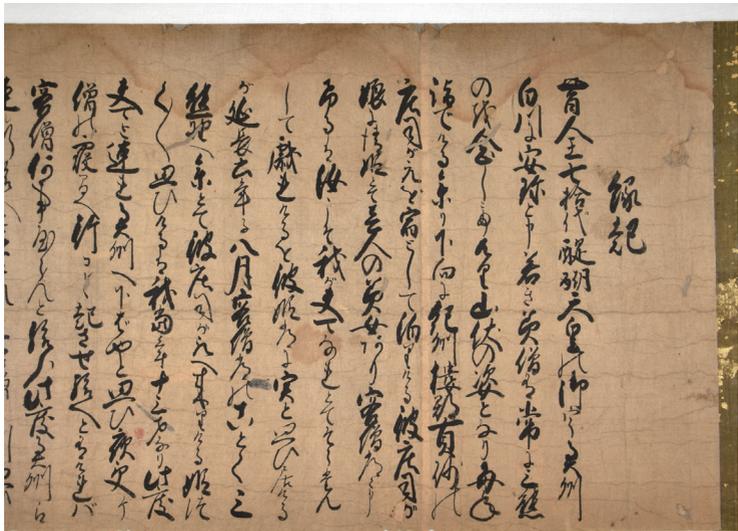
【写真1】表紙



【写真2】見返



【写真3】巻頭



【写真4】安珍を見送る清姫（絵二）



【写真5】煙管の通行人（絵三）



【写真6】走り追いかける清姫（絵三）





【写真7】 炎を吐く清姫（絵五）



【写真8】 天田川に着いた大蛇（絵七）

【写真9】都河する大蛇（絵七）



【写真10】釣鐘に入る安珍（絵八）





【写真11】道成寺の門を入る大蛇（絵一〇）



【写真13】骨となった安珍（絵一二）



【写真12】鐘を巻く大蛇（絵一一）

【写真14】悲しむ僧たち（絵一二）



【写真15】二匹の蛇が僧の夢に現れる（絵一三）





【写真16】 荘厳な衣装で現れた男女（絵一四）



【写真18】 旧蔵印



【写真17】 道成寺門前の「殺生禁制の札」（絵一〇）

【付録】大正大学附属図書館蔵『道成寺縁起絵巻』翻刻

(凡例)

- ・ 底本は、大正大学附属図書館蔵『道成寺縁起絵巻』一巻(所蔵者番号 188261 / DE-N)である。
- ・ 改行は原本に従った。
- ・ 〔詞書〕に、一〇一四の番号を私に付した。
- ・ 〔絵〕にも、一〇一四の番号を私に付した。
- ・ 漢字の正字は通行の字体に直した。
- ・ 句読点および「」は、適宜付した。
- ・ 濁点は原本に従った。
- ・ 不読の字は、□とした。

縁起

〔詞書一〕

昔人王七拾代、醍醐天皇の御宇、奥州  
白川に安珍と申、若き美僧有。常にみ熊  
のを念してけり。山伏の姿となり、毎年  
詣でける。参り下向に、紀州樓郡真砂の  
庄司か元を宿として泊りける。彼庄司が  
娘に清姫とて壱人の美女あり。客僧常々申

けるは、「汝こそ我が夫□なれ」とて、そうたむ  
して戯れけるを、彼姫、常に実と思ひ居ける  
が、延長六年<sup>子</sup>八月、客僧常のことくみ  
熊野へ参とて、彼庄司が元へ来りける。姫つ  
くく思ひけるは、「我当年十三才なり。此度  
夫□と連れ、奥州へ下ばや」と思ひ、夜更け  
僧の寝間へ行、「コレく起させ給へ」と有ければ、  
客僧「何事やらむ」と給ふ。「此度奥州え、

連れ行給へ」と言ければ、客僧「はつ」と思ひしが、「イヤく未だ年も行ざる者、少し偽さむ」と思ひ、「如何にも、只今はみ熊野へ参る成。下向に寄て、つれ行む」と言ければ、姫悦びて、明る日、庄司か元を立出しを、はるく門送りして別れけり。

〔絵一〕「庄司か宅」

〔詞書一〕

夫より常々下向日に当□けれとも見へされ。

「遅き事」とて待かね、道まで迎ひに出けれとも、客僧は見へず、「不思議さよ」と思ひ、順礼の通るに尋しは、

〔絵二〕

「ノヲく先達の御方へ申。墨染着たる御僧を自がかげご手箱を取違へ行候。如何程

延々いかむ」と尋向ひければ、

「左様な僧には、七八丁を跡にて逢候」と申ける。

跡なるもの申給、「イヤく、七八丁と申事はあらじ。十二三丁も過ぬる」と申ける。

〔絵三〕

扱は娘、「道より通りたりし〈偽也〉。腹立や。たとへ何国の雲の果迄も追かけるものを」と草履杯のぬげるも覚へず、追かけけり。

□髪の毛も立上り、  
飛がごとくに追掛る。

今形勢を道者共見て

「扱々すさまじき

女なの気色也」と

言けれども

耳にも更に

聞入ず。

〔絵四・画中詞〕

〔切辺五体王子〕

折節切辺川に水出て渡るべき

様もなし。アラ口惜や、いかゞわせむ。

命を爰に捨果て切辺川に

浮名を流すとも

力なしとて、口すさみして

渡りけり

〔詞書三〕

頓て上野といふ所にて、彼僧を見て、

「ノヲく夫なる御僧を見たる様成。御方なり。

待給へ」と有ければ、客僧、跡を見て「はつ」と

おもひしが、「角は参り候へ共、人違にても候はむ」と

ねんじ

ける。「いやく我か見る目に違いわせし」と息を吹

かくれば、不思議也。其息、火焰と成、客僧の姿に

掛れり。客僧是を見て、「扱は叶わじ」とや思ひ

けれ。笈も笠も取て捨失、「うする方へ失よ」とて

珠数をくり、「南無大慈大悲権現」と口に唱へ、

〔絵五・画中詞〕

〔欲知果去縁 現去現在果

欲知未来果 現去現在果〕

〔詞書四〕

如斯、因果経の四句の文を唱へ逃にけり。其

功力にや、彼女、目暮み、十方にくれたり。其内に

客僧は一里半計逃延ひ、天田川迄来り。

渡守に頼みけるは、「我渡して跡より、すさまじき

女な来るべし。かならず其女を渡すべからず」

と頼ければ、「心得たり」と待居たり。

〔垣屋浦〕

彼女、僧を見失ひ、「腹立や、口惜い」と思ひ、悪念果、首より上は大蛇と成ければ、女な、道成寺へ祈誓しければ、「南無大悲の観世音菩薩、此世も後の世もたすけ給へ」と祈誓しながらしたい来る。

〔絵六〕

夫より天田川へ来り、  
「爰を渡してたべ」と  
言ければ、

〔絵七〕

渡守、申様は、  
「イヤ、此船は、日高川、  
女人けつかい、  
渡されず」と言ければ、  
「其儀ならば、苦し

からず」と、着たる

衣をぬき

捨て、川へ

飛び入るぞと

見へしが、

則甘尋計の

大蛇と成て、

安々と渡りけり。

〔詞書六〕

彼安珍は、一里半計逃延ひ道成寺へ来り、「か様く、事ともなり。何卒命を御助け候得」と頼ひければ、其由、小僧更取法印へ申ければ、「かくまい置由」との事なり。「なれども火急の事、如何して隠さはや」と言。若僧共、寺内の者共、寄て釣鐘を下し、「是へふせ置くより外に仕様もあらむ」と申ける。「如何にも可然」と申合せ、

〔絵八〕

「法印」「ちぢ」

「トコイくくくく」

「ハリヤ」

「ハリヤ」

「エイカ」

「テントセ」

「ヤンエ」

〔詞書八〕

斯て客僧をば釣鐘をおろし、其内に隠し置。

手々に太刀・鍔の鞘をはずし、「たとへ如何なるもの□もせよ、切なくり逃ざし」とて待居たり。

〔絵九〕

「タカ々女性の事ジャ」

「ナンノソノ」

〔詞書十〕

夫より大蛇、道成寺を心ざして来り。六拾式たむの

きだはし上る。待居たる僧衆、是を見るより跡をもみずして、壺人も残らず逃にけり。

〔絵一〇〕

「道成寺」「二王門」「殺生禁制の札」

〔詞書九〕

彼大蛇門内に入、寺中残らずさかしけれども、客僧

見へず。「不思議さよ」と思ひ、夫より釣かねをおろし

けるを見て、「扱は此内にこそ有けるよ」と思ひつめ、

りうずをくわへ、七巻半まとへ、尾を以て鐘を

叩き、三時半、しろければ、其鐘、則、陽と成り、

内より火焰出にけり。「扱こそ本望とげたり」とて、

道成寺の西浦なる入海に身をなげ死にけり。

今に至る迄、蛇塚ツツミといふ伝へ古跡あり。

〔絵一一〕

〔詞書一〇〕

其後、法印始、寺内の者ども集り、鐘に

水をかけ、引あげ見れば、客僧は、炭と

成り、かい骨の如くになりにけり。

〔絵一二〕

「扱もいとしや」

「扱もく、むざんなる事かな」

「ア、南無あみだ」

〔詞書一一〕

「それ前迄、美僧にて有けるが、残念なる次第也」と、皆々かむるい袖をしぼりける。

〔詞書一二〕

其後、法印の夢に見へ申けるは、

「我々兩人、今蛇とふへ落て、苦うなり。」

哀れ御功に御助け下されば難有存るなり」と申ける。

〔絵一三〕

〔詞書一三〕

夫より法印夢さめ、「扱々ふびむや」と思われて、僧衆を数多集て、とむじやうの功に被成ける。其功力により、亦其後、

〔絵一四〕

〔詞書一四〕

清じうのはう衣着したる三人来り、申給、「誠に御功の御願により、此度、天人に生を受け、此上もなき難有存る成」といふて、手を合するよと思へば、夢はさめにけり。

（以上）